

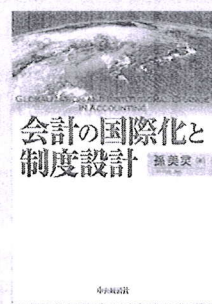
書評

孫美灵 著

『会計の国際化と制度設計』

(中央経済社刊/本体4,600円+税)

国際会計基準審議会(IASB)前理事 鶯地 隆継



新鮮な驚き

ページを開いて全体の構成を見た瞬間、大変新鮮な驚きがあった。私自身長い間IASB(国際会計基準審議会)の理事を務めていた関係で、会計の国際化や制度設計に係る多くの書籍に触れる機会があったが、本書はそれらの書籍とは全く違った観点から書かれていた。通常、会計の国際化という話は、米国会計基準やIFRS(国際財務報告基準)の発展の歴史と日本との関係について議論が展開されているものが多かったのであるが、本書ではまず中国における会計制度改革の視点から考察されている。

中国は共産主義国家であり、米国や欧州、そして日本とも異なる社会システムを持っている。中国が開放経済に舵を切ったのは40年ほど前で、その比較的短い期間の中でどのような葛藤を乗り越えて今に至ったのかという分析は一読に値する。著者はその分析を通して、国際化の本質とは何かという命題に迫っている。日本人の多くの人にとって、国際化とはすなわち欧米化であったような気がする。それは、中国にとってもある程度は同じであったのだが、中国では異なる社会システムの中での変革であり、社会システムのインフラストラクチャーである会計を変えて行くことが、いかに大きなチャレンジであったのかを本書を通して伺い知ることが出来る。

また、本書の中で著者は制度設計の重要性を強調する。そして、効率的な制度は人間に努力するモチベーションを与え、個々人の努力が一国の経済成長を生み出すと考えられる点を指摘する。同時に、国外からの借り物の制度はうまく機能しないことにも留意する。其の上で、日本・中国・韓国が地理的に隣接しており、漢字を使用し、儒教的考え方を共有していることから、日中韓が抱える問題点が類似していることを踏まえて、参考になるポイントを炙り出している。

国際化と制度設計という視点

本書の優れた点は、制度設計の重要性に真正面から向かい合っていることである。著者がその点を強調するのは、やはり、短期間の驚異的な成長と、共産主義下の効率的な市場経済の発展を実現した中国というケースを分析したことによる。中国の発展を1978年から90年代初頭の黎明期、1992年から2005年までの国内発展期、そして2005年からのIFRSへのコンバージェンスの時期に分けて分析している。

その上で、後進国の後発優位性を発揮して、先進諸国の会計制度を模倣し、導入することは容易であるが、制度を有効に機能させる経済環境までも「輸入」することは出来ないと断ずる。そして制度が内生的に進化する場合に、その過程で築き上げられる制度的環境を

一気に整備することは出来ないのだということに注目し、その課題に中国がどのようにして立ち向かってきたかということを手際よく解説している。もちろん中国の場合は政府主導の改革であり、トップダウンでスピーディな決断と実行が出来るという面はあるが、旧制度と新制度を併存させる体制のもと、旧制度を徐々に新制度の方に近づけていく二元的な手法など、我が国が今後の制度設計を考える上で大いに参考になる点があると思う。

また、本書の中で、中国がIFRSとのコンバージェンスを果たすうえで、IASBに対していかに力強く働きかけて来たかについても触れられている。たとえば、IAS第24号「関連当事者についての開示」では、国有企業を多く抱える中国の場合にとんでもなく大量の開示が必要になってしまうため、国有企業については開示が一部免除されるような特例を認めさせたことなどが挙げられている。また、現在IASBでは共通支配下取引の新基準の審議が行われているが、ここでも似たような問題がある。このような例は、経済システムが根本的に異なる法域でも適用が可能な国際基準をつくることの難しさを示しており、大変興味深い。

コーポレート・ガバナンス/内部統制と会計

本書ではコーポレート・ガバナンスの観点からも議論が展開されている。私も内部統制プロジェクトを担当した経験があるので良く分かるが、内部統制と会計は一蓮托生である。優れた内部統制システムがあって初めて会計は機能し、期待された役割を果たすことが出来る。また、逆にしっかりした会計のベースがあって初めて内部統制が有効に機能しているかどうかが見えるのである。

著者はこの点を分析するに当たって、まずコーポレート・ガバナンスのあり方に注目する。コーポレート・ガバナンスには外部的コーポレート・ガバナンスと内部的コーポレート・ガバナンスがあると、外部的コーポレート・ガバナンスは市場規律が強く働くアングロサクソン型であり、内部的コーポレート・ガバナンスはどちらかという社会的慣行に根差すものであると分析する。その上で調査した数字に基づいた分析を展開しているのは面白い。

また内部統制に関しては、中国のみならず、韓国、日本の例に当たり、実際に多くの企業の実務担当者とのインタビューを通じて、具体的な手法を分析している。会社によって内部統制の背景にある事情は異なるので、こういった内部統制を導入する企業の立場に立つての分析は貴重である。さらに著者は内部統制の限界とコストについても触れ、その制度設計のむつかしさも示している。

会計教育の国際化とIFRS

本書ではさらに会計教育の国際化についても、中国・韓国、そして米国の状況を詳しく分析をしている。会計教育は国全体の会計リテラシー、とりわけ原則主義ベースでの判断などの共通認識の醸成に不可欠であり、中国と韓国が歴史的な背景もあって国際的な会計教育に非常に熱心であったことが良く分かる。

私がIASB理事であった頃、中国の国家会計学院を訪問したことがあるが、驚くほど規模の大きい立派な施設と組織であり、中国政府が会計というものをいかに重視しているかが分かるものであった。日本が学ぶべきことは多く、本書はそのガイドになると思う。